

幼稚園に

カリキュラムは必要か

和田 実

和田先生の

御意見を拜見して

芦 田 昇
竹 田 俊 雄
海 卓 子
松 村 康 平
坂 内 ミ ツ
武 田 一 郎

□□幼稚園にカリキュラムは必要か□□ 和田 実

終戦以来、幼稚園の教育が、著しく学校化すると共に、其の教育法が、小学校に倣って、学習化して来たことに對して、我等は驚きの目を墮つて居るものであるが、殊に、其の最も著るしきは、幼稚園カリキュラムの編成が、やかましく云われて、各地方に於ても、夫々特殊なものが、色々發表されて居ることである。計画の無い教育は有り得ないと云う趣旨のもとに、幼児教育も計画を立てると云う意味でカリキュラムが、やかましく云われて居るようであるが、是は、少し行き過ぎではないかと思ふ。抑も、幼児のあそびは型にはまった学習作業ではない。従つてあそびは割り当てられた学習課程ではない筈だ。あそびは、興味本位の娯樂行動で、課程作業たる性質を持っていない。儼然たる学校の教科課程に類する取扱いをすることは、幼児の娯樂を取り上げて、作業を強要することになる。是は、幼児には堪え難き苦痛に相違ない。

然るに今日の多くの教育者は幼児の「あそび」を教科課程と同様に扱わせようと云うのは、何う云う考えだろうか、現在教育指導者の意図が計り兼ねて、解釈に苦しむ次第である。

又「あそび」は興味本位の自發性行動であるから、其の取扱いは成る可く、子供の自由に任せて、大人の干渉のないのが宜しいので其処に、幼児の自主性の發達の機会があるのに、所謂「カリキュラム」を見ると、作業の始めに當り、要らざる干渉や、導入問答や、指導説明を加えて、子供の欲せざる思考問答を強いて居る。為めに子供が、愈々、其のあそびの活動に入ろうとする時には、盛り上り掛けた興味も冷めて、充分に、熱のある活動が出来にくいと云うこ

とになる。而も、此のような授業をして、模範研究授業などと云っている。是は、幼稚園のあそび生活を、小学校の学習活動に模倣しようとする誤りである。幼稚園の生活は、型にはまった学習作業ではない。全く、子供の娯楽生活でなければならぬ。或は云う。幼児の発達要容は、皆学習の結果である。幼稚園と云えども学習はある筈だ。従つて、「あそび」を学習單元として扱つてもよいではないかと、併し、幼児の学習は不知不識の内に行わる、無意識なる自然学習で、決して、意識的自覚的に行わる、ものではない。此の意味の学習は幼児が生れると共に、始まると云つても差支えないが、学校に於ける教科課程の学習と同様には論じ難いものである。学校に於ける指導による学習は、無意識なる自然学習ではなくて、教師の熱意ある指導により、生徒の自覚的な意欲に因りて、行わるる努力的作業である。単に、娯乐的には扱えないものである。之に反して、幼児の「あそび」は興味に乗じたる娯楽行動で、此の興味を原動力とし、之を指標として、自律的に、変化発展して行くべき性質を、多分に持つており、夫れでこそ、幼児の個性の、自由にして自律ある発展が出来るので、幼児は是によつて自然、其の個性の拡充強化を遂げることが出来るのである。要するに、学校の課程的学習は、自学自習を目標とする努力的勉強で作業であるが、幼稚園に於ける「あそび」は、興味本位の娯楽生活である。娯楽生活の内容たる「あそび」を、学習作業の教材たる文化財と、同一に取扱ひ兼ねることは云う迄もあるまい。尤も、幼稚園児の最年長者に就いて見れば、遊びより分化したる作業活動は、可なりに発達して、幼児自身も、相当、学習意欲に燃えて来てはいるが、然りとて、之を急い

で学習活動をさせねばならぬと云う程に、差し迫つた問題とも思えない。聞く所に因れば、長野県の某地方では、此の時期の幼児を集めて、翌年の就学に臨む準備教育として、「一日学校入学」という行事を催おし、幼児の好奇心を利用して、就学の心構えを持たせようと云う企画を実行して居る由であるが、誠に、親切な思ひつきで敢て反対する程のことでもないが、然りとて是を余り頻繁に実行されては、自然、幼児を刺戟し過ぎて、其のあそび生活の裕暢さを傷け、幼児個性の大まかな発達を、阻害する弊害を生ずることは否か難い。夫れよりは、一層のこと先般第二回の日教組の大会（高知市に於ける）で研究されたように、現在、幼稚園の最年長組と、小学校の一、二年とを合併し、遊戯的学習を主としたる三ヶ年の中間学級を作るの案を実行することが適切なのではないかと考へる。元來学習指導による自学自習の勉強と云ふことは、小学校の一、二年級には、まだ無理なので、此の時期の学習は、専ら教師の直接教授による模倣学習を主とす可きで、幼児は是れに因つて、教師に信頼し確固たる安定感の上で、其の勉学を進歩させることが出来、その自主性が暢びて、三年、四年ともなれば、教師の指導に即応して、自学自習の自信も出来ようと云うものである。この日教組大会に於ける研究成果は、誠に、時宜を得たるものかも知れない。

併し、我々幼児教育者の側からは、急いで、賛成は出来ないと言ふのは、幼稚園の最年長組は、まだまだ幼児としての、夢多き生活を必要とする時代で、今、幼児は一方に個性の内容を日増しに強化しつつあると共に、一方に夢の生活実現に、夢中になって居る時で幼児は日々に自己の力量に対する意識を強め、自信を高めつゝ、ある

大事な時であるから、之を早急に破らないで、暫らく、其の完成を見守ってやる必要がある。と思うのである。そして、明けて七つになつて、悠々と学校生活に入るといふことが、子供の偉大なる発達のために必要なことではないかと思ふ。

或る人は、また「あそび」も一種の文化財ではないか。碁、将棋麻雀を始め、諸種の遊戯は、之を文化財と云つて差支えなからう。というかも知れないが、是れは、幼児の「あそび」ではない。我等の云う所の幼児の「あそび」は、是れ等の諸遊戯に比べては、逆も比較ならぬ程、たわいないもので、文化財の影といふことは出来ても、眞の文化財とは云えぬものである。似て非なる文化財の影に過ぎないものを、学校に於ける文化財の取扱いに真似ても是れが、幼児に取つて何の役に立たう。唯、徒らに幼児に無味索莫の感を与え折角の興味を冷却せしめて、将来に於ける学習意欲を鈍らすに過ぎないこととなるに極まって居る。「幼児のあそび」は幼児の自由に任せたらよい。之に余計な干渉を試みることは害あつて益ないことである。故に、我等は主張する。あそびはカリキュラムの材料にはならぬと。

計画と幼児教育。カリキュラムが無ければ計画がないではないか。計画の無い教育は、所謂、放任に等しく眞の意味の教育とは云えぬ。と云う人があるかも知れぬ、がカリキュラムが無くとも計画は出来る筈である。予定表や次第書、さてはプログラムと云うものは必ずしもカリキュラム無くとも作り得る。夫れに、幼児の「遊び」と云うものは大体自然の運行や、社会の情勢と共に、推移するもので、正月には正月の遊びがあり、三月にはお雛様、四月には花五月

に端午、七月には七夕、八月には昆虫、九月にはおまつり、十月には紅葉、十一月お祝い、十二月にはクリスマス、というように、自然の運行と社会の行事は、遊びの予定を充分に与えてくれる。是れは之れ自然のカリキュラムだとも云える。我等は是の自然の推移に沿うて行くより外はない。何を好んで、人為的に横紙破りのカリキュラムなど、編む必要があるらう。尤も、我等は斯くは云うものの「あそび」其のものの内容をおろそかにして居るものではない。「あそび」の内容は大に研究を要するし、其の新材料、新趣向といふものは充分奪むべきであつて、此の研究は一日も忽がせにす可きでないが、所謂、単元を定め、其の發展を予定し、掘り下げを計画すると云うような、学校に於ける学習の眞似事は芸のない事であると思ふのである。

「あそび」の自由とカリキュラム。前にも云う通り「遊び」と云うものは興味本位の娯樂であるから、興味がなくなれば、子供は自然、遊ぶのを止めるようになる。是れは自然である。是れは奨励すべきものではないが、興味の無いものを強いて行わせる訳には行かない。其処に、遊びの自由がある。此の自由は奨励すべきものではないが、併し、此の自由が、自主性の根拠であり、自律、自由、創造の根源であるから、是れを圧制すべきではない。然るに、従来の教育者は是れを単に、子供の我儘と解し、之れを圧迫し、課程を強要することが教育なりとして、子供をいぢめ、遂に、子供から、自主性、自律性を奪い取ると云う奴隷教育をして居つたのは、返す返すも残念な事である。之れに反して、課程と云うものは、嚴然たる実行の義務がある。生徒の自由に、其の主観的興味に因つてのみ、

左右される可きではない。教科課程には權威がある。此の權威は或程度迄守らなければならぬ。斯様に考えて来ると、「あそび」というものがカリキュラムの材料とはならぬことは、自然、明瞭ではではないか。此の明瞭な自由の對象物を捕えて、カリキュラムを編制することを何故に、今の教育の指導者は強要するのだろうか。

才能教育と幼児教育。先頃から信州の某ヴァイオリン師は「才能教育は幼時より」と云う提唱をしている。然して、子供に興味がなくとも行つて居る内に興味が出て来る。練習を積るに従つて、其の興味と効果は、他方に波及して、数学や語学の上にも其の効果を表わして来る。と云う風に説いて居る。そして其の方法として、当該幼児と共に、其の母親をも教育し、其の母親を監督者として、一日数回の練習を、家庭で強要させるといふ方法である。つまり、母親の虛榮心と權威とを利用することによつて、子供の興味の有無に係らず課程を強要しようという云うのである。是れは結局、子供の神經を無用に刺戟するとともに、權威者の恣意によつて、其の感情を「蹂躪」するもので、昔の陸軍が、ビンタ教育、海軍が静坐鍛錬教育をして、叩き込み教育をして居つたのと、何等違わないもので、つまるところ、子供の感情を無視して、權威者に盲従する奴隷教育をして居ることに相違はない。ひが事であることは云う迄もあるまい。今日、幼稚園に、要らざるカリキュラムを作らせ要らざる導入問答や、言葉の解剖さては思想の展開などを強要するのは、以上の才能早教育や、ビンタ教育に類するものと云わなければならぬ。教育の方法は、子供の発達に即せねばならぬ。教育の方法は、其の時期到らざるに、性急なる方法を採用することは、徒らに、人の子を損す

るものである。

幼稚園が、学校教育に類する意図的教育の場所であるとはいへ、小学校以上の学校のように、文化財を以て、教材としているのとは違つて、幼稚園では、まだ充分な価値あるものを、教育材料とする訳には行かぬ。且、子自身も、まだ幼弱であるから、厳格なる修練には堪えられぬ。計画的に教育を考えると云うても、専ら躰の方面でのことで、衣食住の生活方面では可なり厳格に予定することも出来るが、遊びの方面では、然うは行かぬ。予定を立てるにしても、極めて、大まかな案を立てるより仕方がない。子供の意志を尊重し子供の興味を尊重し、子供の自由裁量の部分を多くした教育でなければ、子供を益するより害する方が多かるう。由来、幼稚園は、其の組織環境を、教育的に整理し、積極的に設備を充実することによつて、子供が、自然に、教育されるように仕向けるのが本来の行き方である。

要するに、幼稚園では、家庭で、充分に、充たされなかつた「あそび」の種類を充足し、其の社会的取扱いによる子供の社会性の芽生を培い機能的家庭教育を補すると共に、学習生活へ向けての完全なるディーネスを発達させようとするものであつて、幼稚園が積極的な所謂学習活動を、直に、行なおうとするものではないので、本格的学習生活を幼稚園が行うことは、寧ろ、有害であると思つるのである。従つて、幼稚園ではカリキュラムを確立せず、自然な環境を利用して、大まかな予定の下に、教師の技量に信頼して、誘導的教育を主とすべきであると思つのである。

(目白幼稚園長)

心理学的考察

芹 田 昇

目白幼稚園の和田実先生がその年来の持論である「幼稚園にカリキュラムは要らぬ」を公にされるに当り、予て先生の説に全幅の賛意を表して来た私の「心理学的考察」を添えて諸賢の批判を待ちたいと思ふ。

「幼稚園カリキュラム不要論」については既に先年お茶の水女子大学で開催された幼年教育研究会に於て、羽仁説子女史を講師とするカリキュラム研究部会で、私の発言に基づいて「幼稚園にカリキュラムは不要である」旨を部会の決議として進言することになったのであるが、その後何の反応もなく今日に至っている。ここに略説する所はその時に私が述べた内容である。

幼稚園のカリキュラムがカリキュラムとして熱心に論議されて来たのは実にカリキュラム及び幼児に関する誤解に基づくとと思われる。先ずカリキュラムからはじめよう。「カリキュラム」は普通「教育課程」と訳される

が教育が学習の助成を意味するならば教育課程は具体的な学習経験の課程すなわち「学習課程」でなければならぬ。今日の教育が個人の経験を経とし社会の要求を緯として行われるべきことは周知の事実であるが、この常識を形式的盲目的にあらゆる年齢層に鉄則として適用する所に問題がある。

元来課程は一貫性を持つべきものであり、便宜上いくつかの単元に分けて学習されるものである。従つてこれ等の単元は相互に関連し、結局は総合されて学習者の豊かな知識の体系を形成すべきものである。学習の過程には時に高原(停滞)の現れることがあるが、これを予防して常に順調な進歩を期待するためには、学習に当つて局部に捕われず大局を達観し、云い換えれば、単元学習に於ても単元だけに捕われず課程と云う上位体制と関連させて学習する必要がある。又学習効果の量や速度を直接問題にしなくとも学習とはかく

あるべきものである。

課程を区分した単元はもちろん課程よりは小さなものであるが、その内容は一般にかなり複雑なものであり、且時間的にも相当な幅を持つている。例えば「お月見」だの「秋のよろこび」だのと云つても、実際に計画されたものは一日や二日で終るようなものではない。現在多くの幼稚園で行つている所は二週間から四週間にわたる単元である。幼児はこれだけの時間をかけて単元を深く学習し課程を広く理解することを期待されているのである。ところで、このような単元が幼児にどのような意味を持つであろうか。

ここで幼児が児童とどんなに違うかを考えてみよう。子供には一筆画を得意とする時期があるが、これは幼児的な特徴を端的に示すものである。このような幼児は一筆画なら描けるが、途中まで描いて一旦筆を止めた絵に、加筆して完成することが出来ないのである。それは彼等の生活が心理学的現在に限定されていることを意味している。心理学的現在とは私達が普通に感じている今と云う程度の時間的ひろがりを目指す。音楽が楽しく味われるのは此の現在が瞬間ではなく或る程度の時間

的幅を持つて、論理的には既に過去に属する音が現在として感じられメロディーやハーモニーの知覚が成立するからである。一筆画から二筆以上を加筆して人物を描き上げるようになっても頭でっかちな非現実的な人物を描くのは、先に描いた部分（下位体制）をまだ出来上らない完成像（上位体制）の部分として更にこれから描こうとする部分をそれと関連させて各部の比率がほぼ客観的に妥当な統一体としての人物表現をすることが出来ないからである。小学校の四年生位になってもこのような人物画を描く子供がかなりいることは注意を要する。総合的な表現が幼児には極めて困難であり多少複雑なものは殆ど不可能であることは蜂の巣形の図形を描かせてみれば明かである。幼稚園児で完全に此の図形が表現出来るのは全く例外と云つてよい程稀である。

少し方面を変えて文字の学習について考えてみよう。周知の如く幼児はよく文字を左右逆に書いたり時には完全に逆立した字を書いたりする（同じことが顔面らしいものにも認められている）その理由は幼児は文字の意味よりも形に重点をおく、云はば形を主目的と

して覚える結果なのである。詳細の説明は紙面に余裕がないから省略するが、主目的としての行動は変容し易いのである。かなり文字になれた児童は意味に重点をおく。文字の形は従なのである。つまり文字又は文章の意味という上位体制で行動し、その際は下位体制におかれるのである。この差は或る程度は練習によって加減されるが、併し多分に年令的・発達のな差に規定される。幼児の書く文字の変容は年令的な傾向なのである。

知覚の構造と運動の構造とは多少発達速度が違ふが、幼児と児童とが一見質的な差を示すことは右のような一、二の例を見ても明らかであろう。幼児も興味を持つとぼつぼつ文字を覚える。好きで覚えるものを禁じる必要はないが、思い出した時には左右が逆になるような時期には文字を教へても大して意味はない。この方面では幼児はまだ学習の適期に達していないからそれはむしろ精力の浪費である。これを強いて、將來に文字学習を嫌う傾向を植へつけなければ幸である。

教育に當つて幼児の時間的体制が極めて貧弱である点・総合的機能の未分化な点は最も注意を要する。幼児は現在を充分生活するこ

とは出来る。又過去の記憶をいくつか再生することも出来るし、時には未来の楽しみを口にすることもある。併し過去や未来を含めて現在に体系づけることは不可能又は極めて困難なのである。そのような幼児が二週間も四週間もかかつて行つたさまざまなことを綜合して理解すると云うことは急にはできない相談である。もちろんその間に生活した内容は他日思い出され、後日再編制されることはある。従つてカリキュラムに基づいて行つたことがまるきり役に立たないとは云えないにしても、そんな程度ではカリキュラムが意味あるものとは云われない。

更に考えさせられるのは幼稚園のカリキュラムがしばしば「抽象的な単元を掲げていることである。例えば「秋のよろこび」とか「自然に親しむ」とか云ふ類である。然るに幼児の生活は具体性をその特徴としているのである。幼児でも経験の範囲内で次第に抽象的なことも理解しては行くけれども、それはまだまだ問題になる程のものではない。ごたごたと羅列された遊びから「秋のよろこび」だの「自然に親しむ」などと云う抽象的な単元の意味を理解する力はないのである。幼稚園の

カリキュラムは時には全く同じ内容を掲げて年少組ではそれが「秋のよろこび」であり年長組ではそれが「秋の自然」であったりするが、これらは全く教師の恣意的な案と云う外はない。

幼児が遊んでいる生活に若し単元を求めるならば、彼等が広い意味で学習している（実興味をもつて遊んでいる）一つ一つの具体的な勝手な遊び、僅かな時間で終わってしまう具体的な自由な生活の一駒一駒が、実質的には最もこれに近いものであろう。併し短時間で終る具体的な遊び、例えば「水遊び」「砂遊び」と云うものを単元だと考えても、自己中心的で感情のままに動く幼児に意識的な学習を行わせることはできない。ましてこれを

課程にまとめることなど思いもよらぬと云わねばならない。

その解決（整理）は遠い将来に持越されるのである。それで幼児には単元も学習課程も成立しないことになる。つまりカリキュラムと云う名の下に保育を行つても、カリキュラムを持つてゐるのは先生だけであり、肝腎な幼児にはそれは全く無意味なものなのである。先生にだけしか通用しないカリキュラムはそれはカリキュラム（学習課程）ではない。実際的には一種の計画に過ぎないものである。実際に存在する筈のないカリキュラムが、何のことわりもなく掲げられ論議されるのはむしろおかしいと思つたのである。

（東京学芸大学助教）

和田氏のカリキュラム論を讀んで

竹 田 俊 雄

幼稚園で少し研究的なところは、大ていどこかの壁にカリキュラムといわれるものが掲げられている。保育の雑誌にはカリキュラムとその解説がつきものになっている。こうし

た風潮が保育界をおおつているときに、ヴェラン和田氏がカリキュラムは必要かと反論を唱えられることは、まさに冷水をあびせられた思いをするものが多いであらう。

幼稚園という場は、フリーベル以来こどもの遊びを中心とする生活がいとなまれ、こどもの自発性を重んじた保育が正統とされて来た。すべてのものを枠にはめ込まなければ気のすまなかつた日本の教育界でも、幼稚園だけは比較的自由の気がみちみちしていた。ところが戦後幼稚園が学校の一つとして認められるようになる、日本の学校のもつ短所までも幼稚園はこれを背負うことになって来た。和田氏のいわれるような形でのカリキュラム熱もその一つのあらわれである。

和田氏が「幼稚園の生活は型にはまつた作業ではない」とされ、「所謂カリキュラムを見ると作業の始めに当り、要らざる干渉や導入問答や指導説明を加えて、子供の欲せざる思考問答を強いて居る」と非難されるのは評者も同感である。このような、「模範研究授業」はヘルバルトを知らない人が賞讃するのがせいぜいであらう。和田氏の筆が走つた「才能教育」にしても、それは一部の子にはよく合致した教育方法であらうが、損された多数の子の上に積み重ねられていることは、我々の経験する通りである。和田氏のいう通り「教育の方法は子供の発達に即せねばなら

ぬ」のである。

けれどもこのような論旨でカリキュラムを否定することは、子供の発達に即した保育をするためには、やはり行き過ぎではないかと思われる。私はカリキュラム学者ではないので、カリキュラムのことをあまりうんぬんすることはできないが、カリキュラムという術語は、ずいぶん幅広く用いられている。教材カリキュラムから経験カリキュラムまで、そしてその間に種々雑多な型のカリキュラムがある。和田氏のカリキュラム論には、このようなカリキュラムの定義づけがなされていないが、大体教材カリキュラムをもってカリキュラムとして、これを否定されていると解される。目下流行しているのが教材カリキュラムだとしても、このことからカリキュラム全体の必要性を否定するのは誤解を招くおそれが多分にある。

次に保育とあそびとの関係である。和田氏は幼児のあそびについては、それが興味本位の娯楽行動であると説き、それが自発的であるところに特質があることを主張し、それによって個性の発展が期待されることを述べられている。このように述べられている限りは、まことに当然のことである。

けれども保育ということがどのようなことかについて、和田氏には論じ足りないところがあるように思われる。幼児の生活は遊ぶことが中心であるが、保育するということは、たゞ子どもが遊ぶがま、に遊ぶことではなくて、子どもを遊ばせることであり、遊びを通してその発達を助けることである。遊びが子どもの生活の中心であるならば、子どもの遊びを豊かにしてやり、それを一つの方法として、子どものパーソナリティを発達させるように努力することが保育であると考えられる。

これは和田氏のいわれるような遊びと、その自発性を尊ぶことであるが、同様にそのような行動をひきおこす環境をつくり上げてやることであり、それを子どもの発達の方向に導くことである。幼稚園の庭に一台のすべり台がある。子どもが友達とさそい合ってそのすべり台へ乗り、すべって楽しむ。すべり台は一つのコースであり、しかも子どもにとって楽しいコースである。いやがって泣き叫ぶこともをすべり台の上から突き放さないかぎり、やはり子どもにとって遊びである。

保育において遊びであるというのと、コースをつくっておくということとは、そのコースのつくり方が不合理でない限りは矛盾することにはならない。幼児は課題意識がまだ強くないから、和田氏のいう「自然学習」となるわけであるが、幼児の意識でなく、行動の面から見ればやはり立派な学習になるわけで、この意味で学習という概念を棄て去る必要はない。小学校の学習をもって「本格的」というなら別であるが、これもまた学習であり、それが小学校の学習に陥らないかぎり、は有害とは思われない。

私はもちろん現実の幼稚園保育において、和田氏も指摘されるような有害な学習がかなり広い範囲で行われているのを知っている。それなればこそ和田氏はこれを否定されるのであるが、それは本質の問題とはいわれなないのである。

子どもの発達を助けるための環境的なコースとしてのカリキュラムは、まじめに保育をしようとする限り、必要であると私は考える。小学校の真似事は不要であるが、子どもの発達にかなった文化財は大いに保育の中で利用するがよい。幼児文化財は「似て非なる文化の影」などと考えられることは、かえっ

て幼児を理解しない言葉ではなからうか。遊びや幼児文化財は私のいっているような意味では立派なカリキュラムの材料となる。自然カリキュラム、行事カリキュラムであっても幼児の心理を無視すれば使えないものにはならない。たゞこゝろいう保育カリキュラムはレディメイドのカリキュラムであっては絶対にならない。それらを一つの資料として研究するこ

和田先生の御意見を拜見して

海 卓 子

とはもちろんよいが、大切なことはその幼稚園の社会環境や一人々々のこどもの発達を考えた上で、教師が作成すべきものである。ここでは言及するいとまがないが、その場合生活指導、しつけといわれる面も十分計画の中に入れ、和田氏のいわれる「教師の技量」で保育を進めて行くべきであろう。

(病床にて) (愛育研究所員)

「カリキュラム」という言葉はどのようなことを意味するものなのでしょうか。又「プログラム」とは？ と次々に疑問が起きますが、ともかく「カリキュラム」を普通云われている教科課程、或は学習指導計画位の意味に解釈して、私の考えていることを二、三記してみます。

幼児の教育は小学校のカリキュラムを下に延長しようなものであつてはならないとする和田先生の御主張は誠にその通りであると思存します。幼児は小学校の低学年と比較した

時に、単なる発達段階の差に止らず、質的にも異なるものを持っているようにも思われます。小学校の生活は学習生活であり、従つて知的なしごとが大きな部分を占めて居りますが、幼稚園は生活の場所であつて、学習生活の基礎となる集団生活に適應する態度と能力を培うところであると存じます。

こどもの生活は「あそび」であるからといって、こどものするまゝに遊ばせておいて、はたしてこのような態度が養えるでしうか。日々子供を取扱つて居りますと、具体的

な場面ですぐ何とかしなければならぬと色々な問題にぶつかります。大勢の中で指をくわえて遊びを傍観している子供、泣いたり逃げ出したりする子供、或は園内を我がもの顔にのし歩くボス、又これを取巻きひたすらに仕えまつる子供たちの群、など。教師はこのような場合に黙つて見すごしているのでしょうか？ 誰でも何等かの処置をとつていようか。このように教育とは教師が何とかしなければならぬと感じて、「手を打つ」ことであると存じます。この場合に天才的な教師であれば、予め計画を立てずともその場その場で最も適切な取扱いをしてゆくことが出来ましよう。けれど悲しいことに人間には凡人が多く、行き当りばつたりではなかく、完全な手が打てません。前以つて計画が立てられるのはあたりまえのことでしょう。

集団生活に参加出来るく子供といつても、よく観ますといくつかの類型があります。例えば他人に何でもしてもらつていて未だに行動が自立していない子供、神経質で必要以上に場面を意識して緊張する子供、大人の中に育つて子供らしい生活感情に欠けていて、子供のあそびに興味の持てない子供、自分に対

する要求水準が高くても能力があるにもか、わらず劣等感を持つてゐる子供等がそれです。

この子供たちを集団生活に参加させるためにはそれ／＼に応じた取扱ひが考えられなければなりません。或者は先ず身のまわりの始末を自分で出来るようにすることから始めるとか、又は集団の刺戟が少くなるように小人数で適当な仲間を作つて先づその中で遊ばせてみるとか、劣等感の強い子供には、子供自身にも仲間にもその子供の長所を認めさせるような機会を作るなど、方法は様々でありますがともかく自分から仲間に入ることが出来るような働きかけを工夫しなければなりません。

例えば入園当初の保育案には予め以上の事柄を予測して、どの子供も集団生活に参加出来るようにするためにどのような「あそび」を選び、どんな方法でこれを実施するか、出来る道具的な細い計画が立てられなければならない。計画案の実施に当つてこのもの活動を見て、計画案にとらわれることなく目標達成のために臨機処置がとられなければならない。これは云うまでもありません。

このような具体案はあくまでも一つの施設

に即したものであつて、情況を異にする他の幼稚園にもあてはまるといふものではないように存じます。申すまでもありませんが、この計画案は一人々々の教師の主観によつて作られるものでは更になく、今、この幼稚園或は保育所に託されている子どもの問題ごもたちの家庭、及び地域社会の生活の反影としての一に即したものであつて、現在の社会に於て理想とする子どもの人間像に照し合せて、問題として取上げなければならぬ問題を具体的な教育の目標とするものです。この目標に到達するために最もふさわしいと思われ、その方法について立案されたものが所謂、カリキュラムであると存じます。

一つの施設で一緒に教育に當つてゐる何人の教師が同一方針の下に一貫した取扱ひをすることが出来てこそ、一人々々の子どもの教育の効果が現れるものと考えます。

集団生活の価値はこの指導があつてこそ、初めて生れるので、単なる集団は集団の効果が充分発現されないだけではなくて、時には集団の弊害をも生むものであります。

先生の御言葉にあるように、現在は小学校

のカリキュラムを真似て御説のような問題もある事とは存じますが、これはカリキュラムを持つことが悪いのではなく、カリキュラムの内容の問題になるのではないのでしょうか。

子どもの衣食住については計画的な厳しい躰けも必要であると申されますが、これとて「あそび」との関係はどう考えたらよろしいのでしょうか。幼児であるが故に生活の大部分は「あそび」であり、基本的な生活の習慣も子どもの側からすれば「あそび」と考えられないこともありませぬ。「指導」が好まれないと主張される方は「抑圧」を問題とされますが、基本的な生活習慣の場合はこれを問題とせず、その他の場合にのみ「抑圧」を云々されるのはどういうことでしょうか。勿論「抑圧」は好ましいことではなく、どのような場合にも避けたいものです。子どもが自分の能力を充分發揮し、自発的に行動し創意を刺戟する条件とは何でしょうか？

教師の観察、分析、計画的な働きかけ、これらが繰返されることによつてのみ、子どもの好ましい活動を刺戟する条件の数々がはっきりしてくるよう存じます。時には行過ぎることがあるとも一つの試みとして、計画

をはつきり立て、効果を観察して、その適否を吟味してゆけばいつの日にか幼児の教育

はかくあらねばならぬという答えが出るのではないでしようか。
(白金幼稚園)

幼児教育をめぐる問題

松村康平

一
かった、らこの文を書く気にはならなかったでしよう。

二

幼児教育を「めぐる」問題を取りあげるのは、実のところ、余り気が進まないのですが幼児教育への関心がたかまると、結構なことばかりでなく、好ましくないこともなにかとおこりがちなので、このあたりで、問題のありかをはつきりさせて、幼児教育の大本を失わないように、お互い気をつけよう、それは、余り気の進まぬことでも、取りあげて、黒白のつくものなら、はつきりさせておくと、まあ、そりいったつもりで、筆をとりました。

幼児教育をめぐる問題が、家庭から離れた場所(施設)つまり、幼稚園や保育所のあたりを中心として、どのように展開しているでしようか。

主なものを拾うと、

第一は、幼稚園と保育所との間に生じている問題。

第二は、経営者と教育者との間に生じている問題。

永く幼児教育にたずさわっておられる日白幼稚園の和田実先生が、「幼稚園にカリキュラムはいらぬ」という一文を発表され、それを編集部で取りあげ、私の意見を求められな

第三は、幼児園(幼稚園と保育所)と小学校の間に生じている問題。これには、現在の幼児園から小学校へ入学するについての問題、幼稚園の小学校化の問題、小学校の幼児園化

の問題等を、あげることができましよう。

三

第一に、幼稚園と保育所との間に生じている問題ですが、

ところによって、幼稚園と保育所が、ひどく対立しているところ、そうした問題の生じていないところもあって、まち／＼です。

幼児の教育を、真剣に考える人たちは、一般に、幼稚園と保育所との一元化を、考えているようです。実際には、これまでの歴史や管かつが文部省と厚生省というように、違ふことや、建前が異なることなどから、容易には実現できない問題なのですが、

幼稚園へ通う年ごろの子どもを、保育所で保育する際に、保育に「欠ける」ところを、ただおぎなうだけでなく、積極的に、施設を通して保育するとなれば、幼稚園における教育と、実際にはあまり変わらぬものとなるでしよう。また、幼稚園でも、子どもの生活指導を重視するならば、それが保育に欠ける家庭の子どもであると、否とを問わず、幼稚園における生活だけを、問題にするのではなく、保育所ではいつも問題にされている「家庭」

への配慮や、連絡を、充分にとる必要が、一
そうでくるでしよう。

保育所の経営にあたる人が、「保育に欠け
る」子どもを、主体にしなかったり、幼稚園
の経営にあたる人が、子どもをなるべく長い
時間、あずかれれば、喜ばれるからといった、
本来の建前を忘れての「歩みより」ではなく
施設を通しての幼児期の教育が重要なことを
理解して、現にある二つの施設を有効にいか
そうとする動きは、もりたてていくべきだと
思われます。

第二の、経営者と教育者との間に生じてい
る問題もいろいろですが、ここでは、激増し
た「個人経営」の幼稚園でみられる問題、た
とえば、

初め、経営者が、有能な保育者と手をたず
さえる必要から、保育者を尊重しても、一年
たち二年たちして、経営と保育の仕方になれ
ると、これまでの保育者を、不当に解雇する
といった問題をあげましょう。

これに対しては、経営者たちが、自粛し、
互にけん制し合い、保育者（教育者）たちは
相互の連絡をよくとり、組織の力を通して、
正しいことの実現されるように、努力してい

くべきでしよう。

四

第三の、幼稚園と小学校の間に生じている
問題の中には、

入学試験を必要とする小学校を受験するた
めに、はやくから受験勉強をしたり、テスト
の練習をするためにでてくる問題がありま
す。

これについて述べる紙数があまりありませ
ないので、ここでは、幼稚園の場合ですが、入
園試験の一例をあげましょう。

T先生にお聞したのでありますが、先生のところ
では、希望者が多いので、まず幼稚園の趣旨
に賛同する家庭の子どもを選び、あとは簡単
なテストをおこない、点数のよかったものを
上から、定員の半分とり、点数の悪かったも
のを下から、定員の半分とっておられること
でした。

入学試験の方法に関する小学校側の研究と
受験させる父母の賢明な処置が、要望される
ところですが、

和田実先生が問題にされたのは、幼稚園教
育の学校化に関するもので、

入学試験準備のための幼稚園より、広く、
幼稚園全体として、終戦来、幼稚園カリキュ
ラムの構成が、やかましくいわれ、「あそ
び」を学習化するようになった、しかし、本
格的学習生活を幼稚園が行うことは、寧ろ有
害である、幼稚園ではカリキュラムを確立せ
ず、自然な環境を利用し、大まかな予定の下
に、教師の技量に信頼して、誘導的訓育的教
育を主とすべきである、ということです。

この根本をなす考えには、私も賛成で、カ
リキュラムの構成が、小学校でのような学習
のためであるなら、この言葉を使わぬほうが
よいと思うのですが、生々とした経験を豊富
にするための保育計画という意味でなら、使
つてもよいでしょう。それなら、カリキュラ
ムという言葉は、ことさら使わなくてもよい
ということにも、なりそうですが、

私には、カリキュラムという言葉が使われ
るようになった戦後の小学校教育は、それま
での幼稚園教育と近づいたと思えるので、カ
リキュラムという言葉に、学習化の恐怖を、
あまり感じていないのと、

私は私流に、カリキュラムという言葉を使
う時には、小学校から幼稚園へと下へのびて

きたように思われるその言葉を、一応受け、
「内容的には」子どもの自発活動を尊重
し、「逆に」に小学校へ及ぼして、ややもす
ると詰め込み主義になりがちな傾向の是正に
役立てようとする思っています。つまり、小
学校と「つながりのある」言葉をかりて、内
容的には、下から上への方向性をもち、小学
校のカリキュラムも、これに準拠しなければ
ならないほどのものを、考えています。

カリキュラムが語られるようになって、幼
稚園の先生が、「幼稚園ではお勉強をする」
つもりになったのなら、大変ですが、社会の
動きをとらえ、幼児をつつむ環境を整える際

和田先生の御意見を拜見して

坂 内 ミ ツ

幼稚園の教育についてはいろいろと細かい
点まで調査研究されて、各方面で発表されて
居ますことは誠に喜ばしい事でありますが、
其根本である幼稚園のあり方、実生活の様
式等についてはあまり問題にされて居ないの
はどうしたことかと疑問に思つて居ります。

にも、従来よりは社会の要求を考慮する必要
を感じて、計画をたて、教育者のひとりよが
りの趣味におちいる危険をふせいで、また、
一時は低下したといわれた教師の技量の、手
助けとなったのなら、喜ばしいことでしょ
う。

ほかに、小学校の幼稚園化の問題、幼年学
級の問題、それとカリキュラムとの関係など
については、紙数の都合で、ふれることがで
きずに、筆をおきます。

(お茶の水女子大学助教授)

自分で考えて見ても確乎たる解決が得られず
苦しんで居りました、折柄今回和田先生が発
表なさいましたので、此苦しみの上に活を入
れていたゞいた気がいたします。

各方面に於て理想的に整備された幼稚園に
あつては、先生の説に大に賛成するものであ

ります。戦後幼稚園が学校系統の中に加えら
れ学校教育法の中に幼稚園の目的を示されて
から、急に幼稚園教育は保育ではない教育で
なければならぬ、新保育であるから旧套を
打破しなければならぬという声が高くなり
ました、けれども学校教育法第七十七章第七
条及び七十八条の各項に示してある幼稚園の
目的は従前の幼稚園令の目的と大差なく、心
身を円満に発達させる人間教育であり、基礎
工作であつて其芽生えを養えと明かに示して
あります。理解力、記憶力、発表力、創作力
の芽生えを養うなどといっても、体験を通し
て、なければ会得出来ないのが幼児期である
から、いろいろの経験をさせる必要があるの
であります。処が実際は幼稚園に在つて個性
の異なる大勢の幼児と接して見ると、どうも
理想通りには行かないのであります。在園の
時間にもよりますが、子供は興味あるあそび
をして居るといってもそう長くはつゞかぬも
のであります。消極的な子供になるとどんな
あそびにも興味を起さないのであります。殊
に入園当初安定感を得させ興味を覚えさせる
までにするには一通りならぬ熱意が必要なの
であります。此千種万様な個性を持つて居る

子供を一人々々誘導して手落ちのないようにするのは困難な極なことであります。殊に現今の実状から見ても多くの幼児には次のような欠陥がありますので理想論が実現されないのではないかと思います。

- 一、幼稚園の環境、設備が理想的でなく、殊に遊び道具が少い。
- 一、一園の人数が多過ぎる、又一組の人数も多過ぎる。

一、先生方の素養が狭いため興味が偏する。

一、行事にとらわれ過ぎて子供の心の奥に及ばず影響や、目に見えないしつけなどに思い及ぶひまがない。

一、幼稚園は特色を持つべきものと思いつけて居る園がある。

一、家庭では幼児の発達程度を高く見過ぎて不当な要求をする。

以上の何れが原因となります上に社会性の発達等を考えると、子供の興味本位に生活させることが出来なくなるので、先生方は不安を感じ何か抛り処がほしくなるのではないかと思います。又経験の積んだ先生といつても計画を立て、置かないと、行き過ぎる処が

あったり、不行届の処があったり、忘れたりすることが無いではありませんから計画は立て、置かなければなりません。呼び名こそはカリキュラムと申しますが、幼稚園にあつては計画表或は予定表と見てよいのではないかと思います。従つて小学校のカリキュラム学習課程とは全く異なるものであります。近頃はカリキュラムといわず保育課程、保育計画などと呼ばれて居るのは其辺のことを物語つて居るのではないと思われれます。尤も課程、教科、学習、指導実地授業などという用語を幼稚園に用いてあやしまれないことがあるのは、小学校教育と混同して居る向きがあるのだとは思いますが、

又不思議なことには幼稚園のカリキュラムといえば大方は年長組を対象として編成されたもので年少組に及ばないのが多いようです。名古屋で発表された保育課程には二様に考えてありますが、三才の組には及んで居りません。これは日教組が研究されたように又米国の或州のように一ヶ年だけを幼稚園とするならばうなずかれますが、現今我が国の幼稚園は家庭の状況、交通の点などから見てやはり三才からと考へたいと思ひます。東京の

一部の園の如く一年保育より収容出来ないのは設備のないためで己を得ざる変則と考へたいと思ひます。幼児の生長発達は小さいほど早いので、三才児と五才児との差は一年生と五年生ほどの差があります。これを一様に生活させようとするのは無理な話であります。年令相当の計画が立てられ年令相当の生活をさせるのが当然だと思ひます。

要するに計画的な予定表は必要であります。それよりも其表を活用する方法についてもっと、實際家に研究していただき度いと思ひます。幼稚園の生活の在り方は、外に現われる結果よりも、目に見えない大きな影響を幼児の心の奥深く浸み込ませて居るのであるということを念頭からはなさないようにしなければならぬのではないと思ひます。

(ひまわり幼稚園長)

幼稚園のカリキュラムというもの

武 田 一 郎

和田さんの論文を拝見した私の感想を率直に申せば、幼稚園のカリキュラムについて、和田さんのいだかれる基本的なアイディアに賛意を表したいと思います。しかし、論述の文章の表現形式については、いさ、か意見をもちます。ここでは、特は二つの点について意見を申し述べたいと思います。

まず第一に、「カリキュラム」ということばの意味についてであります。幼稚園でカリキュラムが必要であるとかないとか言ってもいい、「カリキュラム」ということばをどのように理解するかということが決まらなければ、結局は水かけ論になってしまうのであります。私をして言かしめるならば、和田さんは一面において幼稚園におけるカリキュラムを否認しながら、他面においては肯定されていると申したのであります。和田さんの否認されるカリキュラムとは「割り当てられ

た学習課程」であり、「厳然たる実行の義務がある」ものを意味しておられるよりであります。今でも「カリキュラム」をこのように理解される人が相当多いようです。しかしこのような意味でのカリキュラムとは、ひとりわが国だけでなく、アメリカでもそうであったように、学習指導要領（コースⅡオプⅡスタディーズ）というような文書材料そのものをさしており、しかも教育の標準を子供にかないで学年におき、どの子供も画一的にその標準によって規正しようとした伝統的なカリキュラムをさしているように思われます。

ところが、今日の新しい考え方のカリキュラムとは、単に書かれた外にある文書は材料に過ぎず、カリキュラムとは子供みずからが獲得する教育的な経験の全体を意味しており、しかも教育の標準をどこまでも子供自身にこうとしているのであります。だから極言すれば、カリキュラムは子供ひとりごとりによ

って違わなければならないという考え方になるわけでありませう。つまり新しい考え方が言うと、刷り物にした予定計画、つまり書かれた学習課程を意味するカリキュラムは、実は子供の経験としての望ましいカリキュラムをもたせるための用意に過ぎないものであります。だから小学校においてさえも、この用意に過ぎない課程を強制的な「厳然たる実行」の義務あるものとは考えてはいけません。まして幼稚園においては言うまでもないことで、この点、私は和田さんのご意見に全く同感です。

ところで和田さんは「カリキュラムが無くとも、計画は出来る筈である。予定表や次第書、さてはプログラムと云うものは必ずしもカリキュラム無くとも作り得る」と言われ、正月から十二月に至る自然や社会の変化に應じる「あそびの予定」を考えておられ、これを「自然のカリキュラムだとも云える」とおっしゃっておられます。私は、これこそまさにりっぱな幼稚園のカリキュラムだと申したいのであります。私には、カリキュラムがなくともプログラムは作れると言われることに一つの矛盾があるように思われるのでありま

す。つまりこれは前述のように、「カリキュラム」ということばの解釈の相違に原因するわけでありましょう。和田さんが言われる「自然のカリキュラム」によって、よい環境のもとで遊ばせることを幼稚園カリキュラムの原則とすることに同感です。しかも和田さんは「あそびの内容は大いに研究を要する」と言われ、決して無方針の放任に委せるべきでないことを強調されているのであります。これこそ幼稚園の望ましいカリキュラムであり、こうした活動の中でこどもの知的、身体的、情緒的、社会的な全体としての成長発達をさせることを目標とすべきであります。

もう一つ和田さんの論文について申し上げたいことは、和田さんが幼稚園の教育と小学校の教育とをあまりにはっきりと区別され過ぎていられるように思われる点であります。幼稚園では遊びで、小学校では権威ある教育課程によらなければならぬという考え方には、直ちに賛成しかねるのであります。私としては、むしろ小学校でも、特に低学年時代には理想としては、幼稚園時代のような教育の手法を多分に加味すべきだと考えるのであります。幼稚園を修了したとたん、小学校になっ

たというので、にわかにがみがみとやられたのでは、子供はたまったものでありません。最近読んだあるアメリカの雑誌に、「幼稚園」という名称をやめたらどうかということを書いてありました。その趣旨は、幼稚園と呼び、小学校と呼ぶところから、両者の間にはっきり線を引き、教育の方法が両者によつてはなはだしく違ってくることの危険を指摘しようとする点にあるのであります。もっとも和田さんは日教組の研究による「幼稚園の年長組と小学校の一、二年とを合併し、遊戯的学習を主とした三ヶ年の中間学級を作る案」に一応賛意を表されている点から考えると、必ずしも幼稚園と小学校の低学年とでそんなに方法が変わるべきではないということも承認されているようにも思われます。私は日教組の案については存じませんが、アメリカでも早くから幼稚園と小学校の下学年(一、二、三年)を含めたカリキュラムを構築し、この期間は無学年学校(Ungraded School)と呼んで学年の区別を設けず、この期間のカリキュラムを修了した者を初めて四年という学年に編入するという編制方式を提案しています。子供の大部分は四年間でこのコースを

修了するでしょうが、少数の子供は五年で修了することを予想しております。この編制方式は幼稚園年長組から一、二、三年にかけて自然のコースを踏ませるとともに、上級になってからの落第をも防ぐ意図をもってしています。とにかく、幼稚園から小学校への連絡は、もっと自然にしたいものであります。終りに、きわめて論理的に分析された和田さんの論文から、多くの示唆を得たことを感謝します。

(お茶の水女子大附属小学校校長)